

【研究ノート】野城式土器に関する一考察—土器の焼成実験を通して—

久貝 弥嗣（宮古島市教育委員会）

はじめに

11世紀後半から16世紀にかけては、沖縄県内の考古学においてグスク時代と時期区分される。筆者は、これまで宮古島のグスク時代を大きく3つに時期区分を行い、それぞれに島外からの外的要因による文化的インパクトを想定してきた(久貝 2014)。その中でも、中国産陶磁器の組成、出土銭貨、石積遺構、土器の様相などの点において沖縄諸島とは異なる文化要素を強くもつのが、第2期とした13世紀後半から15世紀前半と考えた。

第2期の遺跡から出土する土器の多くは外耳を付した鍋形の器形をなし、概ね野城式土器として認識されている。第2期の文化要素の一つである野城式土器に関する研究を深めていくことは、第2期の文化要素をより明らかにしていく重要な研究課題の一つであるといえる。

本論では、これまで研究の主体とされてきた野城式土器の形態的な分析とは異なる視点からのアプローチとして、野城式土器の年代的位置付けについて沖縄諸島の外耳土器の出土状況を参考にして考えるとともに、土器の焼成実験を通しての野城式土器の胎土に焦点をあてていきたい。

1. 野城式土器とは

野城式土器は、下地和宏氏によって提唱された土器型式である(下地 1978)。下地は、それまでの宮古島市内における発掘調査で出土した土器の分類概念について整理を行うとともに、自身が表面採集を行った野城、高腰、ムイ島遺跡の出土の土器について、胎土や外耳の形態など分析を行い、野城式土器の特徴を以下のとおりにあげている。

- ・色調
 - ①；内外面及び芯部ともに黒色ないし黒褐色のもの
 - ②；内面は黒色で外面は褐色ないし赤褐色を呈しているもの
 - ③；内外面とも赤褐色にないしは褐色を呈しているもの
- ・器種：口縁部の形態から鉢(本論でいう鍋)、壺の2種
- ・混和材：2つの混和材の種類に分類
 - A類；貝殻細片(1mm程度のものが多い)およびサンゴ石灰岩の粉末を少量含む
 - B類；胎土に混入物が全く含まれないもの
- ・底部の形態

Aタイプ：立上りに丸みをもった平底で器壁がほぼ垂直をなす

Bタイプ：器壁がカーブをなす

Cタイプ：若干くびれを呈する

- ・焼成度；吸水性が強く、「黒色磨研土器」とよばれる硬質の土器は未採集
- ・横耳状の外耳を貼付する土器も少なくない。

野城式土器の分類概念については、この下地の分類概念が現在までも踏襲されている。その後、新里貴之は、宮古・八重山諸島の土器について、器種ごとの形態的な分析、胎土や器面調整などを総合的に分析し、野城式の年代観を13世紀前半から14世紀前半に位置づけている(新里2004)。また、発掘調査に伴う資料の増加に伴い、野城式土器の全体形を伺える資料も増え、胎土分析も含め新たに器種として碗形、甕形の器種を追加している(新里2015)。その他、野城式土器を含めた宮古島市内の土器の胎土分析(山崎2018)や、ミヌズマ遺跡出土の野城式土器を対象とした土器圧痕分析も行われている(眞邊ほか2019)。

2. 野城式土器の年代観について

(1) 宮古諸島出土外耳土器の年代的位置付け

野城式土器の年代観を考える上で、外耳を貼付した土器(以下、外耳土器)の出土は、他地域との比較を考える上で重要な野城式土器の要素である。当然ながら外耳だけが、野城式土器を示す直接の分類概念ではないという前提は必要として、外耳土器の出現期について考えていきたい。

外耳土器の出現期を考える上で、大きな壁となるのが遺跡からの出土遺物の組成である。久貝は、これまでに宮古諸島の遺跡を大きく第1期から第3期の3つの時期に区分してきた(久貝2014)。それぞれの時期における単純遺跡というのはほぼ皆無である。そのため、野城式土器の出土する遺跡では、古いものでグスク時代初期の11世紀後半もしくは12世紀前半頃から始まり、15世紀前半頃までの遺物が出土する。出土遺物の主体は第2期を示すものが多いが、第1期の遺物も含んでいる以上は、その時期を明確に位置付けることが困難なことがこれまでの状況であったといえる。

しかし近年、松原遺物散布地において第1期に限られた遺構と遺物の出土が報告された(宮古島市教育委員会2019)。松原遺物散布地は、宮古島市平良字松原に所在する遺跡で、平成28(2016)年に宮古島市教育委員会によって発掘調査が行われている。発掘調査では、Ⅱ層下面において、掘立柱建物跡1基と土壇墓1基が検出され、柱穴内からは白磁玉縁碗やカムイヤキが出土している(第1図)。土壇墓より検出された埋葬人骨の年代測定値 calAD1037-AD1183(2σ)を示しており、出土遺物の年代観とも整合性を有する結果といえる。そして、注

目すべきは、この柱穴内から野城式土器とは異なる胎土の土器が出土している点である。土器は鍋形の器形をなすが、方形の把手を貼付した土器や外耳式土器の出土は確認されていない。現在確認できる事例はこの松原遺物散布地のみで、今後の調査事例の増加による検討を必要とするが、野城式土器や、外耳土器の出現期は 12 世紀後半以降を示す可能性を有している。

(2) 沖縄諸島出土の外耳土器

鍋形の器形に横耳をつけた土器は、少量であるが沖縄諸島の遺跡からも出土している。ここでは、八重瀬町内のテミグラグスク(八重瀬町教育委員会 2013)、志多伯遺跡(八重瀬町教育委員会 2012)出土の外耳土器について概観し、野城式土器との関連性について考えていきたい。

テミグラグスクは、八重瀬町字当銘に所在するグスク時代の遺跡である。2009 年に八重瀬町教育委員会によって発掘調査が行われ、11 世紀後半の段階から遺跡が形成され、16 世紀には拝所(聖域)化したと考えられている。堆積層は全体で I～X 層からなり、外耳土器は、第 VIII 層より出土している。第 VIII 層は 12 世紀後半から 14 世紀前半の良好な遺物包含層であり、白磁玉縁碗、青磁鎬蓮弁文などの中国産陶磁器が出土するが、土器が遺物の主体をなしている(第 2 図)。土器の器種構成としては、鍋、甕、壺の 3 種からなり鍋形が主体をなしている。鍋形の土器は、滑石製石鍋模倣土器の型式変化である瘤状突起を貼付した土器や、縦型の耳を貼付した土器などで構成され、12 世紀中頃～13 世紀前半の第 2 段階(具志堅 2014)に位置づけられるものと考えられる。第 VIII 層からは滑石混入土器は出土しているものの、方形把手を貼付した土器は出土せず、瘤状突起が多く出土している点から考えるならば、瘤状突起と外耳土器は相伴関係にあり、縦型の耳を貼付した土器も同様である可能性が高い。

次に志多伯遺跡についてみていきたい。志多伯遺跡は、八重瀬町字志多伯に所在するグスク時代の遺跡であり、八重瀬町教育委員会により 2005 年～2006 年にかけて発掘調査が実施されている。志多伯遺跡の II 地区では、全体で 1～10 層に分層され、3、6、7 層は a～b、a～c に細分される。外耳土器が出土するのは、6 層、7a 層、7b 層である。6 層は溝内の堆積層であり、出土遺物が少ないが、年代の指標となる中国産陶磁器としては、白磁ビロースク III 類、青磁無文外反碗があり、概ね 14 世紀後半～15 世紀前半に位置づけられると考える。本層から出土する土器の様相としては、縦耳を貼付す鍋形土器と、甕形土器と相伴している(第 3 図)。7a 層は 7b 層の流れ込みに伴う層と位置付けられていることからここでは、同一層の遺物組成として捉えていきたい。7a 層、7b 層からは、カムイヤキ、白磁玉縁碗、白磁口禿碗、白磁ビロースク II 類、青磁劃花文碗、滑石バレン状製品、北宋銭、鉄斧、鉄鎌などが出土している(第 4 図)。若干年代幅を有するものの 14 世紀中頃以前の包含層としてとらえ

ることができる。この 7a 層、7b 層から出土する外耳土器は、口縁部の最上部に外耳を貼付しており、野城式土器にみられる外耳とは異なる様相を呈している。しかしながら、浦底遺跡から口縁最上部に外耳を貼付する外耳土器も出土していることから、その関連性が指摘される。その他の土器としては、ほぼテミグラグスクと同様の傾向を示しており、瘤状突起を貼付する鍋形土器や、口縁部が内湾する鍋形土器、また器種としては壺形、甕形、碗形も確認されるが、鍋形土器が主体をなしている。

テミグラグスクと志多伯遺跡の外耳土器の出土状況を概観すると、陶磁器の年代観は白磁の玉縁碗からビロースクⅡ類までと年代観をしばることは困難であるが、沖縄諸島の土器との共伴関係としては、瘤状突起を貼付する鍋形土器と共伴すると考えられる。

3. 土器の焼成実験を通しての胎土を考える

土器の焼成実験は、土器づくりを考える重要な機会であるといえる。宮古島市教育委員会では、2019年7月20日(第1回)と、8月3日(第2回)に文化講座「土器焼き」を行った。本講座に関連して、宮古島市内における土器の胎土となる粘土の採集や、混和材について考える機会をえたので、土器の焼成実験の一例として考えていきたい。

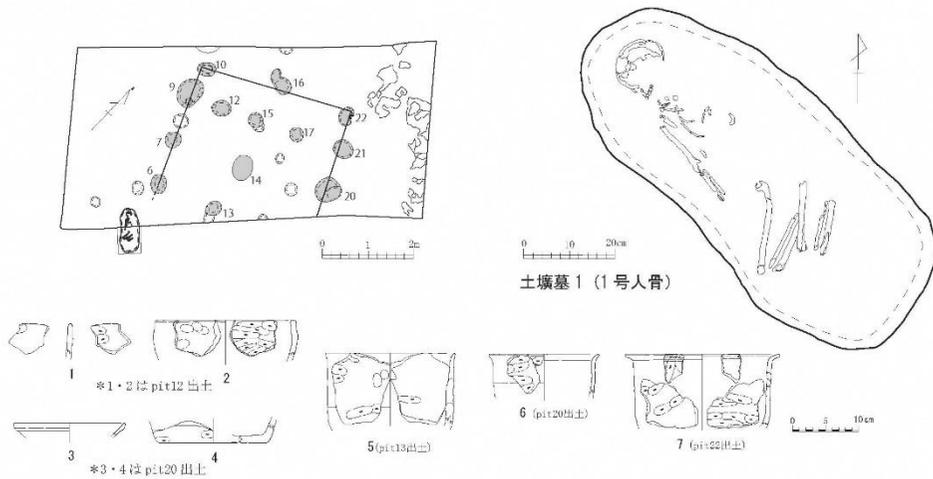
(1) 粘土の素材について

宮古島市内から採取される土を使用しての粘土の作製については、基礎情報がほぼない状態から始まった。野城式土器が多く出土する宮古島の北海岸の遺跡の立地や環境を考えた場合、粘土の素材となる土は、島尻層に伴うクチャと、琉球石灰岩上部に堆積する赤土(マージ)層であると考えられた。実際には、土壌の腐食などに伴う環境的な要素も勘案すべきであるが、今回は、城辺の浦底一帯でとれるクチャと、城辺字友利で採集した赤土の2種を採集して粘土の作製にあたった。焼成実験に際して実際にこの2つの土をどのようにして利用したのかは、土器の観察だけでは分からないことから、今回は、クチャとマージの割合を次の5つに分けて焼成実験を行った。粘土の総重量は、いずれも400gとした。

- ①クチャ 100% ②クチャ 90%+マージ 10% ③クチャ 80%+マージ 20%
- ④クチャ 70%+マージ 30% ⑤クチャ 60%+マージ 40%

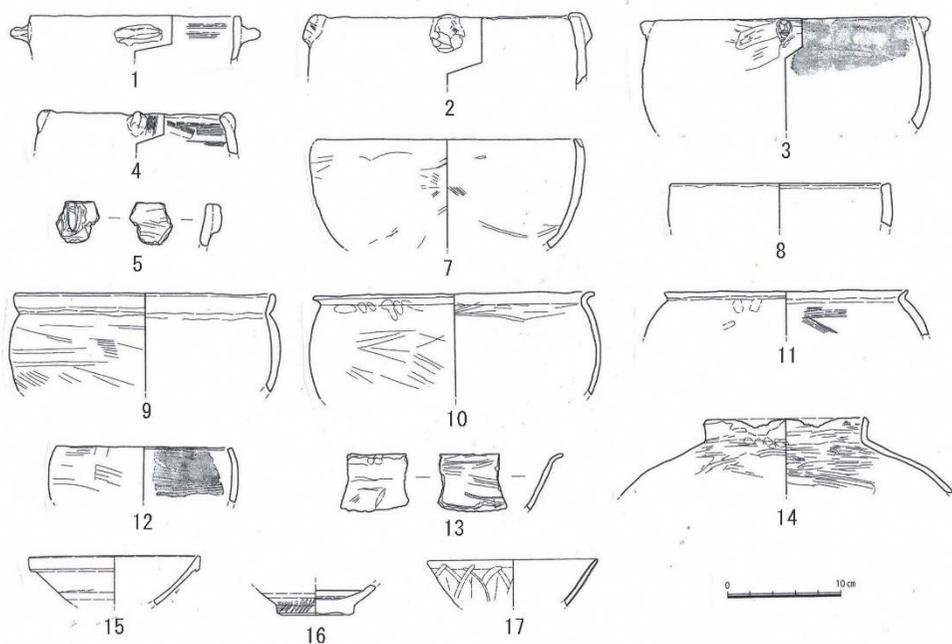
(2) 混和材について

野城式土器の特徴は、その胎土にあるといえる。胎土は、黒味をおびており貝殻碎片を多量に含んでいる。一見すると、器面に混入物を目視することができなくても、断面には密に貝殻碎片を含んでいる資料も多くみられる。ミヌズマ遺跡と野城式土器の胎土分析を行った山崎真治は「前者(貝殻碎片)は意図的に混入されたものであり、しかも海砂のような雑多な生砕物を混ぜ込んだものではなく、計画的に処理された貝殻片を混入したものと考えられる」



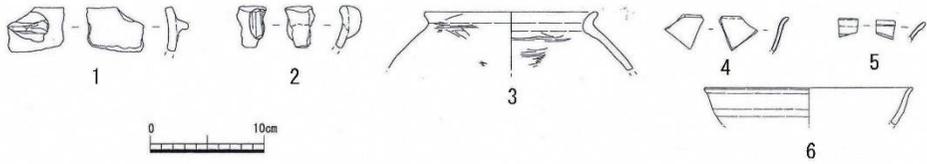
第1図 松原遺物散布Ⅱ層下面における遺構と出土遺物

1・2・4～7：鍋形土器 / 3：白磁玉縁碗



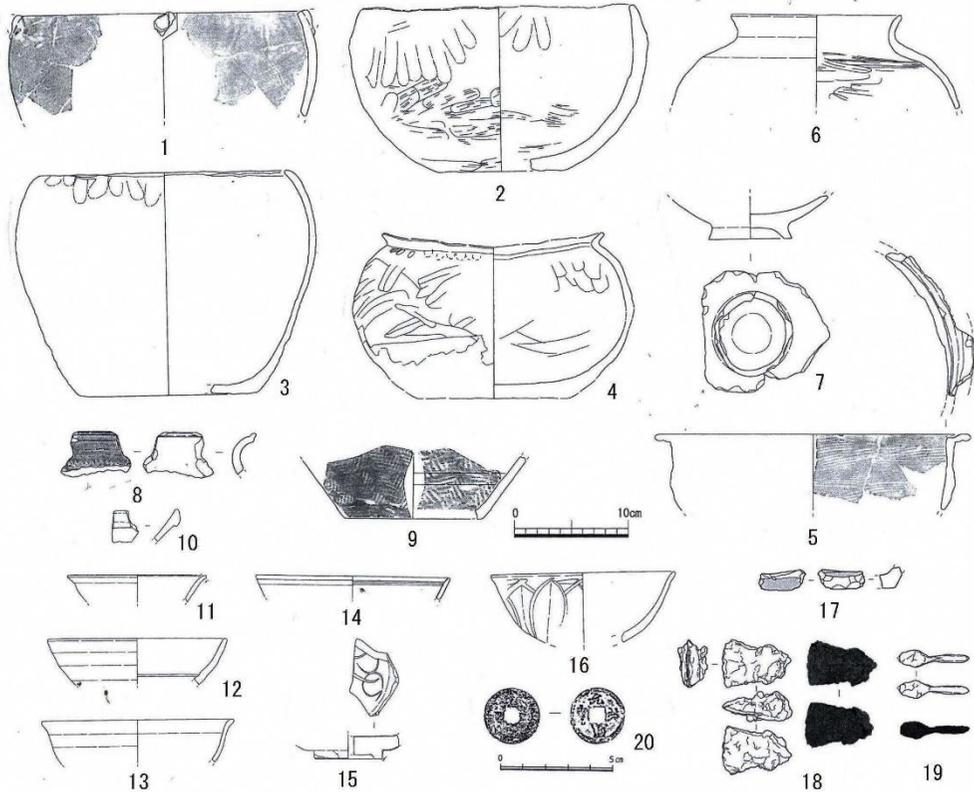
第2図 テミグラグスク第Ⅷ層出土遺物（縮尺は15%）

1：外耳土器 / 2～4：瘤状突起貼付土器 / 5：縦耳貼付土器 / 7～8・12・13：鍋形土器 / 9～11：甕形土器 / 14：壺形土器 / 15・16：白磁玉縁碗 / 17：青磁鍋蓮弁文



第3図 志多伯遺跡 6a・6b層出土遺物（縮尺15%）

1：外耳土器 / 2：縦耳貼付土器 / 3：甕形土器 / 4・5：青磁無文外反碗 / 6：白磁ピロースクⅢ



第4図 志多伯遺跡 7a・7b層出土遺物（1～19縮尺15%、20縮尺40%）

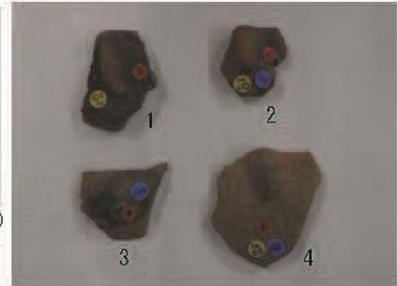
1：瘤状突起貼付土器 / 2・3：鍋形土器 / 4：甕形土器 / 5：外耳土器 / 6：壺形土器 / 7：碗形土器
 8・9：カムイヤキ / 10：白磁玉縁碗 / 11：白磁口禿碗 / 12：白磁ピロースクⅡ類 /
 13：白磁外反碗 / 14・15：青磁劃花文碗 / 16：青磁鎬蓮弁文碗 / 17：滑石製品 / 18：鉄斧 /
 19：鉄鎌 / 20：銭貨〔北宋銭：元祐通寶（初鑄年代1086年）〕



1 外耳土器 (第2図1)



2 石灰質混入土器 (*第28図60)



3 縦耳貼付土器 (2: 第2図5)

*1: 第25図5/3: 第25図7/4: 第25図6



4 甕形土器 (1: 第2図9/ 2: 第2図10/ 3: 第2図11)

*4: 第28図70/ 5: 第27図48



5 刷毛目調整 *第28図58

図版1 テミグラグスク出土土器 (縮尺不同) *は『テミグラグスク』(八重瀬町教育委員会2013に対応)



1 外耳土器 (1: 第3図1/ 3は図版外)



瘤状突起貼付土器 (2: 第4図1)



2 碗形土器 (第4図7 [左: 外面, 右: 内面])



3 刷毛目調整 (第4図1の内面)

図版2 志多伯遺跡出土土器 (写真の縮尺不同)

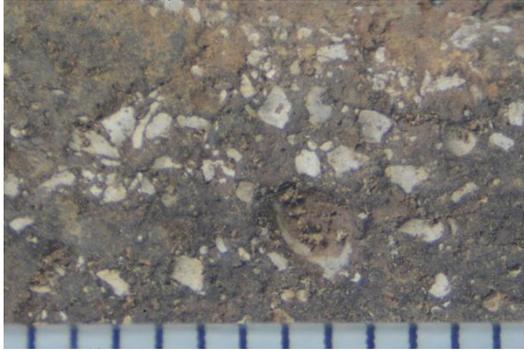


写真 1 野城遺跡出土土器の拡大 (1 目盛りは 1 mm を示す)



写真 3 ムイズマ遺跡出土の土器に確認された陸産マイマイの殻頂部

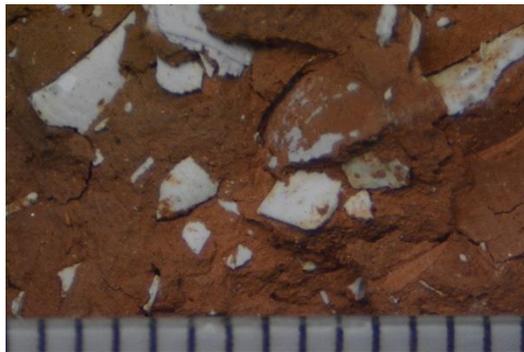


写真 2 ウスカワマイマイを混和して焼いた土器 (1 目盛りは 1 mm を示す)



写真 4 ムイズマ遺跡出土の土器に確認された貝殻片

としている(山崎 2018)。山崎氏が指摘するように、この貝殻碎片を顕微鏡で観察すると、非常に薄い板状の構造をなしており、貝殻碎片のみが多量に胎土に混入されている状況がみとれる(写真 1)。今回、土器の焼成実験に際し、海浜における砂などを採集し、その比較を行った結果、陸産マイマイを細かく擦りつつぶして胎土の混和材として使用しているものと考えられる。野城式土器に混和されている貝殻碎片は、前述したように薄い板状の構造を呈している。海産の貝類の貝殻の厚みは小型の貝類であっても比較的あつく、硬い構造をなしている。一方で、陸産マイマイは貝殻の厚みが薄く、土器の混和材と比較しても同様の様相を呈している。また、宮古島市文化財資料室に収蔵されている下地和宏氏採集の土器資料の観察を行ったところ、ムイズマ遺跡では、殻長部分や、スジの入った貝殻片を確認することができた(写真 3・4)現在、宮古島で確認されている陸棲前鰓類は、29 種が確認されている(宮教委 2019)。これらの全ての種を確認したわけではないが、オキナワウスカワマイマイが最もその可能性が高い種ではないかと考える。また、ミヌズマ遺跡出土の野城式土器については、アワが多く混和され、ムギなども混和している状況が報告されていることから、焼成

実験を行う粘土には、陸産マイマイに加え、アワやムギも混和して粘土を作成した。



写真5 土器焼成実験で混和材として使用したウスカワマイマイ 300 個。左: 破碎前の 300 個のウスカワマイマイ、中: 破碎作業風景、右: 破碎後のウスカワマイマイ (約 200g)

(3) 焼成

前述した粘土と混和材を用いて土器の焼成実験を行った。さて、このような生砕物を混入した土器の焼成においては、温度管理が重要であり、温度が上がりすぎると生砕物中の炭酸カルシウムが水酸化カルシウムに変質して、器体が崩壊することが知られている(縄田 2010)。



写真6 土器の焼成作業風景

今回の焼成実験の結果としては、粘土の割合をかえた②～⑤の粘土全てで、焼成時に破碎することなく焼き上げることができた。①

については、焼成時の工程上途中で作業を中止したため、その結果を確認することができなかった。②・③の焼成後の土器の写真では、一部破損している状況もみてとれるが、これは成形時の作業工程での水分不足に伴うものであり、成形時の作業方法については今後見直す必要があると感じた。

4. 今後の課題

本論では、野城式土器について沖縄諸島での外耳土器の出土状況の検討と、土器の焼成実験を通しての野城式土器の粘土について考えてみた。年代的位置付けについては、今回八重山諸島出土の土器との比較を行うことができず、今後同地域の外耳土器の出土様相や胎土の状況についても検討を深めていく必要がある。

また、土器の焼成実験については、混和材や粘土の割合別の焼成結果については情報を有



写真7 クチャ 90%+マージ 10%の土



写真8 クチャ 80%+マージ 20%の土



写真9 クチャ 70%+マージ 30%の土



写真10 クチャ 60%+マージ 40%の土器

することができたが、野城式土器の最大の特徴である黒味をおびた色調の焼成方法については課題を残した。器面を黒く焼き上げる方法としては、焼成後に地面をほり、その中に焼成した土器を入れ、枯草で覆い、土をかぶせることで蒸焼にするという方法も試してみたが、器面の一部は植物質の炭化で黒味がつく範囲もみられたものの、野城式土器の色調とは全く異なる状況であった。下地和宏氏も指摘するように、野城式土器の一部には、非常に硬質な土器もみられる。このことから土器の色調やその硬度については、焼成方法と密接な加関わりをもつものと推察できる。今後は、この色調や硬度を再現できるような焼成方法について検討を行っていくことも大きな課題の一つである。

その他、山崎氏が行っているように土器の胎土分析も、実際に使用されている宮古島産の土で粘土を製作していく上で必要な分析方法である。課題ばかりのこの結果となってしまったが、今後もこのような土器の焼成実験を行っていくことも、土器を研究していく上での重要な研究方法であることを学ぶことができたことは、大変有意義な機会であった。

・土器の焼成実験に際しては、恩納村教育委員会の崎原恒寿氏、宜野湾市博物館の伊藤圭氏の指

導のもとに行った。また、粘土の採集および土器の成形などの作業については、宮古島市教育委員会文化財資料室作業員の皆様にご協力いただいた。記して感謝申し上げます。

- ・本小稿は、2019年度高梨学術奨励基金（若手研究）の助成を活用して行った。

【参考文献】

- 久貝弥嗣 2014年 「宮古のグスク時代の展開に関する一考察」 『南島考古』No.33 沖縄考古学会
- 具志堅亮 2014年 「グスク土器の変遷」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』六一書房
- 下地和宏 1978年 「野城(ぬぐすく)式土器について」『琉大史学』第10号 琉大史学会
- 新里貴之 2004年 「先島諸島におけるグスク時代煮沸土器の展開とその背景」『グスク文化を考える 今帰仁村教育委員会編 新人物往来社
- 新里貴之 2015年 「宮古諸島土器出現期の様相-グスク時代初期の土器資料の分類・年代観-」 沖縄考古学会 2015年度研究発表会資料『いま、宮古の考古学が面白い！-無土器期からグスク時代への移り変わり-』
- 眞邊 彩・千田 寛之・久貝 弥嗣・小畑 弘己 2019年 「宮古島市ミスズマ遺跡出土グスク土器の圧痕調査成果 『南島考古』第37号 沖縄考古学会
- 宮古島市教育委員会 2019年 『松原部落内遺物散布地 住屋遺跡根間西里遺跡(植物遺体分析)-宮古島市内遺跡発掘調査報告書3-』宮古島市文化財調査報告書第19集
- 八重瀬町教育委員会 2012年 『志多伯遺跡』八重瀬町文化財調査報告書第2集
- 八重瀬町教育委員会 2013年 『テミグラグスク』八重瀬町文化財調査報告書第3集
- 山崎真治 2018年 「胎土分析から宮古島の土器文化」『沖縄県立博物館・美術館博物館紀要』第11号 沖縄県立博物館・美術館

